

戦後70年 南京大虐殺を語る

2015年10月5日

民医連新聞

(1946年9月13日)
第三種郵便物認可

第1605号

(8)

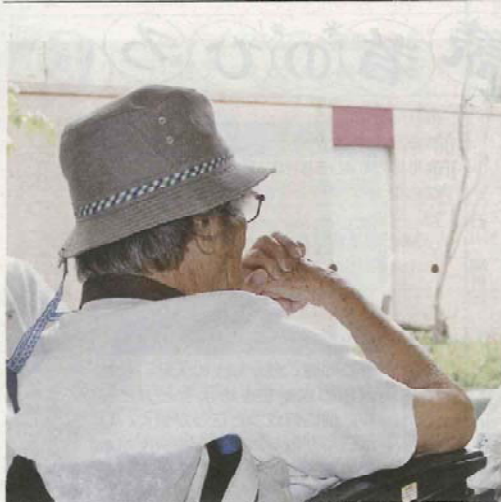
戦後70年
のこす
引き継ぐ

戦後70年シリーズ、今回は「のこす」立場から。八月二九日、四流川・流川健康友の会(大塚)が平和のついでを開きました。そこでは、口中戦争に参加し、南京大虐殺(※)を目撃した三谷翔さんが、加害の体験を語りました。(田口大憲記者)

大阪に住む三谷さんは九六歳。一九二七年六月、一八歳の時に志願して海兵団に入りました。

同年一〇月、駆逐艦「海風」に乗り中国へ。当直で員張りに立ちました。海風を含む第二四駆逐隊の四隻は、約一カ月かけて、揚子江航行部隊として南京に到着しました。

二月二三日、南京陸上から中国軍に砲撃されて、駆逐隊は心戦すでに陥落寸前だった南京は、三分ほど抵抗できなかりました。



三谷 翔さん(96)

無かつたことにはさせへん!

南京大虐殺を見た18歳の日本兵

南京大虐殺...1937年8月から日本軍が南京への爆撃を開始。さらに進軍し、略奪、暴行、強姦などを行ったのち、12月から翌年の3月上旬にかけて30万人もの人びとを虐殺しました。



■生きていたものなかつた
その四日後、旧日本軍の南京入城式に参加するために上陸した三谷さんは、そこかしこに積み上げられた中国人の死体の山を見ました。三谷さんの身長ほどの高さにまでなった死体の山は、老若男女の区別はなく、後ろ手に縛られたり、縄で数珠つなぎにされたり、弾痕や銃剣で刺された跡をさらして折り重なっていました。

■見張りに中へ移された
翌日、揚子江に停泊する駆逐艦

ある民家に入ると、ゼリー状に固まった血の海に、頭のない死体が二つ倒れていました。一八歳の新兵だった三谷さんは耐えられないうほどのショックを受けました。「南京の静けさは今でも忘れられない。生きていたものは何もなく、飛ぶ鳥さえも見えなかつた」と三谷さんは当時を振り返ります。

揚子江は減水期で、殺されて捨てられ折り重なった人間の形が、

■生きていたものなかつた
その四日後、旧日本軍の南京入城式に参加するために上陸した三谷さんは、そこかしこに積み上げられた中国人の死体の山を見ました。三谷さんの身長ほどの高さにまでなった死体の山は、老若男女の区別はなく、後ろ手に縛られたり、縄で数珠つなぎにされたり、弾痕や銃剣で刺された跡をさらして折り重なっていました。

それから毎日、見張りの任務につくたび、そうした光景を目撃しました。朝から晩までトラックで二〇人、三〇人と運ばれては殺されました。夜には、岸辺にいくつもの炎が揺れていて、翌朝望遠鏡から覗くと、人間が焼かれて殺されていたのが見えました。



志願した三谷さん



南京城への江門

で見張りをしていた三谷さんは、「タタタタタン」という重機関銃の音を聞きました。河川敷を見ると、人の群れがバタバタと倒れていくところでした。射撃音の合間には、悲鳴とも怒号ともつかない叫び声が聞こえました。「殺されているのは中国の人だ」と直感。「南京はすでに日本軍が占領した。なのになぜこんなに殺しているのか?」三谷さんはその地獄絵図のような光景に、ひどく混乱したと言います。

日に日に現れてきました。二月二五日、「海風」が佐世保に向けて出発する最後の日も、日本軍の銃声は鳴り止みませんでした。

「兵士として集められた日本人は殺人鬼や強姦魔ではなく、みんな普通の人間。殺さなければ殺される状況は戦争の常。人間を殺してしまふ。」
三谷さんは、証言の終わりに戦争法案の反対と憲法の大切さを訴えました。

■生きていたものなかつた
その四日後、旧日本軍の南京入城式に参加するために上陸した三谷さんは、そこかしこに積み上げられた中国人の死体の山を見ました。三谷さんの身長ほどの高さにまでなった死体の山は、老若男女の区別はなく、後ろ手に縛られたり、縄で数珠つなぎにされたり、弾痕や銃剣で刺された跡をさらして折り重なっていました。

■見張りに中へ移された
翌日、揚子江に停泊する駆逐艦

「戦争はダメや。何が何でも戦争法案を通そうとする安倍の根性が憎い」と、三谷さん。二〇〇歳までは生きられへん。今、伝えたいと真実を語っています。